

令和2年度全国水産試験場長会全国大会（大分）

要 録



期 日：令和2年11月19日（木）

会 場：大分県庁新館 14 階大会議室

大分県大分市大手町 3 丁目 1－1

主 催：全国水産試験場長会

目 次

1	大会の構成	
(1)	大会日程	1
(2)	大会次第	2
(3)	出席者名簿	3
2	挨拶	
(1)	会長	5
(2)	来賓	6
(3)	開催県	8
3	報告	
(1)	平成 31 年度活動結果および令和 2 年度活動計画について	9
(2)	国への要望「地域の抱える懸案事項」等について	9
4	情報交換	
(1)	漁業調査船“新”最上丸	41
5	話題提供	
(1)	大分県佐伯湾における養殖マグロ赤潮対策と課題	43
6	優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式	
(1)	審査委員長経過報告・講評	47
(2)	会長賞表彰式	48
(3)	会長賞受賞記念講演	50
①	北海道	50
②	三重県	55
③	新潟県	59
7	関係写真	64

1 大会の構成

(1) 大会日程

大会行事	開催日時・開催場所
全国大会	令和2年11月19日(木) 13:30~17:00 大分県庁新館14階大会議室

(2) 大会次第

令和2年度全国水産試験場長会全国大会（大分県）
次 第

開催日時 令和2年11月19日（木）13:30～
開催場所 大分県庁新館

1 開 会

2 挨 拶

- (1) 会 長
- (2) 来 賓
- (3) 開催県

3 報 告

- (1) 平成31年度活動結果および令和元年度活動計画について
- (2) 国への要望「地域の抱える懸案事項」等について

4 情報交換

- ・漁業調査船“新”最上丸

5 話題提供

- ・大分県佐伯湾における養殖マグロ赤潮対策と課題

<休憩>

6 優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式

- (1) 審査委員長経過報告・講評
- (2) 会長賞表彰式
- (3) 会長賞受賞記念講演
 - ①「北海道日本海南部海域におけるムール貝養殖技術開発と事業化に関する研究」
北海道立総合研究機構 栽培水産試験場 栽培技術部
代表者 栽培技術部長 清水 洋平
 - ②「アサクサノリ養殖技術の開発」
三重県水産研究所 鈴鹿水産研究室 主査研究員 岩出 将英
 - ③「錦鯉の穴あき病防除対策に関する研究」
新潟県内水面水産試験場 錦鯉穴あき病研究グループ
病理環境課長 的山 央人

7 その他

8 閉 会

(3) 出席者名簿

令和2年度全国水産試験場長会全国大会出席者名簿

○来賓

令和2年11月19日 大分県庁新館大会議室

	機 関 名	役職名	氏 名
国等関係機関	水産庁 増殖推進部	部長	黒 萩 真 悟
	水産庁 増殖推進部 研究指導課	課長補佐	馬 場 学
	一般社団法人全国水産技術協会	理事	和 田 時 夫
	一般社団法人漁業情報サービスセンター	会長	
	全国内水面漁業協同組合連合会	専務理事	内 田 和 男

○海面

北海道	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場	本部長兼場長	木 村 稔
	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 水産研究本部 栽培水産試験場	栽培技術部 部長	清 水 洋 平
	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 水産研究本部 栽培水産試験場	場長	佐 藤 伸 治
東 北	地方独立行政法人青森県産業技術センター 水産総合研究所	理事兼所長	菊 谷 尚 久
北部 日本海	新潟県水産海洋研究所	所長	丸 山 克 彦
	石川県水産総合センター	所長	鮎 川 典 明
東 海	千葉県水産総合研究センター	センター長	大 和 義 久
	神奈川県水産技術センター	所長	利 波 之 徳
	静岡県水産・海洋技術研究所	所長	岡 本 一 利
	三重県水産研究所	所長	山 田 浩 且
	三重県水産研究所鈴鹿水産研究室	主査研究員	岩 出 将 英
	和歌山県水産試験場	場長	岩 橋 恵 洋
瀬戸内海	地方独立行政法人大阪府立環境農林水産 総合研究所水産研究部（水産技術センター）	部長	佐 野 雅 基
	兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター	所長	平 石 靖 人
	岡山県農林水産総合センター 水産研究所	所長	藤 井 義 弘
	広島県立総合技術研究所 水産海洋技術センター	センター長	相 田 聡
	香川県水産試験場	場長	向 井 龍 男
	愛媛県農林水産研究所水産研究センター	センター長	檜 垣 俊 司
	高知県水産試験場	場長	岩 崎 健 吾
	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部	部長	古 川 英 一
	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部北部水産グループ	グループ長	伊 藤 龍 星
	宮崎県水産試験場	場長	林 田 秀 一

○海面

西部 日本海	福井県水産試験場	場長	鈴木 聖子
	京都府農林水産技術センター 海洋センター	所長	井谷 匡志
	鳥取県水産試験場	場長	宮永 貴幸
九州 ・山口	福岡県水産海洋技術センター 研究部（筑前海担当）	副所長	筑紫 康博
	佐賀県玄海水産振興センター	所長	山浦 啓治
	長崎県総合水産試験場	場長	中村 勝行
	鹿児島県水産技術開発センター	所長	矢野 浩一
	沖縄県水産海洋技術センター	所長	平安名 盛正

○内水面

東北 ・北海道	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 水産研究本部さけます・内水面水産試験場	場長	前田 圭司
関東 ・甲信越	栃木県水産試験場	場長	関戸 章一
	埼玉県水産研究所	担当課長	飯野 哲也
	新潟県内水面水産試験場	場長	安澤 弥
	山梨県水産技術センター	所長	大浜 秀規
東海・北陸	岐阜県水産研究所	所長	中居 裕
西日本	滋賀県水産試験場	場長	遠藤 誠
	福岡県水産海洋技術センター内水面研究所	所長	福永 剛

○開催県

大分県	農林水産部	部長	大友 進一
	農林水産部	審議監	景平 真明
	農林水産部水産振興課	課長	高野 英利
	農林水産部漁業管理課	主幹	宮村 和良
事務局	大分県農林水産研究指導センター水産研究部	次長	佐藤 秀俊
		主幹研究員（総括）	田村 勇司
		主幹研究員	金澤 健
		主幹研究員（TL）	堤 憲太郎
		主幹研究員（TL）	内海 訓弘
	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部北部水産グループ	主幹研究員（TL）	木村 聡一郎
		主幹研究員（TL）	徳丸 泰久

2 挨拶

(1) 会長

全国水産試験場長会会長（新潟県水産海洋研究所長） 丸山 克彦

皆さん、こんにちは。4月から会長を務めさせていただいております、新潟県水産海洋研究所の丸山でございます。どうかよろしくお願いいたします。コロナ禍の中、会員の皆様には令和2年度全国水産試験場長会全国大会にご参集いただきまして、ありがとうございます。また、公務ご多忙のところを水産庁の黒萩増殖推進部長様をはじめ、多数の来賓の皆様にご臨席いただき、この場をお借りしてお礼申し上げます。

近年、毎年のように自然災害が発生しておりますが、本年も九州を中心に、集中豪雨などにより甚大な災害に見舞われました。改めまして、被害を受けられた方々に、心からお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復旧復興を強く願っております。

また、今年は新型コロナウイルス感染症の広がりのため、移動の規制やイベントの自粛など、業務遂行に苦慮されていることと思います。本大会につきましても、感染防止のため、例年実施している情報交換会と現地意見交換会を開催できず、大変残念です。

さて、全国場長会は都道府県の海面・内水面の水産研究機関の長で構成された組織であり、昭和30年の発足以来、約60年に及ぶ活動の歴史があります。全国大会は平成23年以降開催されており、今回の大分県で10回目となり、この間、全国を網羅する幅広いネットワークを構築するとともに、試験研究の面から、水産物の安定供給と水産業の発展に努めてきたところであります。

しかしながら、昨今の水産業を取り巻く情勢は、漁獲量の減少、魚価安や後継者不足、また、地球温暖化をはじめとする環境変化や、内湾域で進む富栄養化が及ぼす資源変動、さらには震災復興や全国に蔓延する疾病対策など、これまでも増して非常に厳しい課題に直面しております。

また、年内には改正漁業法が施行され、資源の自主的管理から数量管理に移行するなど、漁業の現場は大きく変化していくことになります。

場長会では、会員が密接に連携し、これらの諸問題に対して調査研究に努めているところですが、これらの中には、国の行政や研究機関のご協力がなければ解決が困難な課題があることから、水産庁や水産機構に対して、様々な要望をしてきております。今後も、これまで以上に国、水産機構、我々地方水試が一体となって課題解決を図っていく必要があると考えております。

本日の全国大会は、会員相互、関係機関との連携を図るための、年に1度の貴重な機会であります。限られた時間の中ではありますが、有意義な大会となりますよう、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりますが、コロナ禍の中、本大会の開催にあたり多大なご尽力をいただきました。地元、大分県農林水産研究指導センター水産研究部の皆様ほか関係の皆様方に心から御礼申し上げまして、開会にあたっての挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

(2) 来賓

水産庁増殖推進部部長 黒萩 真悟

水産庁増殖推進部長の黒萩でございます。WEB開催になるかと思っておりましたが通常の形での開催ということで、私自身も今年の出張が3回目であり、役所に入ってから最小の出張回数になると思うくらい現場での会議がなかったわけでございます。今年はいろいろ多難な局面がありましたが、大会が開催されたことは大変喜ばしいことだと思います。誠に開催おめでとうございます。

コロナ禍の中、地元大分県におかれましても、開催を躊躇されたと思いますが、開催が大丈夫だというふうに対策をしっかりとられて、この日を迎えることができました。また、日頃より水産試験場長会におかれましては、我が国の水産関連試験研究、技術開発の推進にご尽力いただき、誠に感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます。

水産業全体の概要につきましては、会長が今お話されましたので、今日の挨拶におきましては、水産改革の話を中心にお話します。

現在、国におきましては、一昨年漁業法を改正し水産政策の改革に取り組んでいます。水産改革は「水産業の水産資源の適切な管理と水産業の成長産業化を両立させる」ということで、漁業者の所得向上と年齢バランスの取れた漁業就業構造の確立が目的でございます。また、水産改革の中核をなす改正漁業法が来月施行され、それにあわせ、関連する政省令なども施行されます。また、都道府県に関係の深い漁業調整規則、漁業権の運用を見直しの中心としております。海面利用のガイドラインなども各県の担当者と意見を交換しながら、17回も都道府県との意見交換会があったというふうに担当課から聞いております。国の調整規則の認可がおりて漁業法の施行とともに、都道府県調整規則についても大幅改正されたものが施行されるという運びとなっております。

さらに本臨時国会におきましては、「特定水産動植物等の国内流通の適正化等に関する法律」が現在審議されております。この法律は、公布の日から2年以内に施行されることになっており、特に今回漁業法改正で罰則が強化されたアワビ、ナマコ等の国内における違法漁獲物の流通防止と輸入漁獲物の流入防止のための輸入規制を行うための法律でございます。こういったものが今回のトピック的なものとして挙げられます。

さらに、本日お越しの試験研究機関にとって特に重要な政府決定も様々ありますが、その中で、一つは既に決定された「新たな資源管理の推進に向けたロードマップ」です。二つ目は「スマート水産業の展開に向けたロードマップ」さらには、「養殖業成長産業化総合戦略」で、これらは公表されております。それに呼応して、夏に概算要求を行った令和3年度の水産関係予算を現在財務省と協議して政府原案を策定している最中でございます。新たな資源管理システムの着実な実施に必要な資源調査・評価の充実、新たな数量管理の導入等を推進する観点から、資源調査・評価の拡充を要求しております。何回も聞かれているかもしれませんが、資源評価の対象魚種を今後200種程度までに拡大して、資源評価の精度向上を推進するため、漁業者の協力を得ながら行う調査船調査、資源調査、海洋観測等を拡充して、水研機構と都道府県水産試験研究機

関の連携による調査体制を確立することが重点的に予算要求されています。こういったものが政府の予算要求の、いの一に上がるというのは、これまではなかったことであり、科学的根拠に基づく資源評価、資源管理を行うことの重要性を政府全体として認識していることがお判りだと思います。

2番目としてスマート水産業による漁獲情報の収集強化が上がっています。産地市場、漁協から水揚げデータを効率的に収集し、適切な資源評価、資源管理を促進する体制を構築するという予算も要求されております。

3点目は成長産業化に向けた重点的な支援策で、先ほど申しました通り、今年7月に公表された養殖業成長産業化総合戦略を踏まえて、養殖生産の3要素である餌、種苗、漁場に関するボトルネックの克服に向けた技術開発調査を支援します。さらに、大規模な沖合養殖システムを活用したマーケットイン型養殖の導入や新技術を用いた協業化による収益性向上の実証の取り組みを支援するといったことも重点的に要求されることになっております。

これ以外にも、総合戦略における戦略的養殖品目、これは4つ挙げられています。そのうちの一つであるサケ・マス養殖は、現在各地のご当地サーモンを始め、大規模養殖も含めて新たな展開を見せておりますが、このサケ・マス養殖に関する、内水面養殖、内水面種苗生産体制の構築を支える技術開発などについても要求されております。

以上の通り、これらを支える調査研究開発は不可欠であり、さらに重要性を増すことは間違いないと思います。これらの動きに対応いたしております水研機構は大幅な体制整備を行い、適切な資源管理評価のための資源研究所と成長産業化の支えとなる技術研究所の二つの体制に大きく変わり、準備万端の状況になっていると伺っております。

現在の水産政策の改革の方向性に合わせて体制を考えていく、これは皆様方都道府県の試験研究機関においても同様ではないかと考えております。国同様、コロナ禍の予算対応に重点が置かれる中、都道府県におかれましても予算確保は厳しい面があるかもしれませんが、水産改革実現のためにアフターコロナを見据えた対応をしていくことが必要であると考えております。

水産改革は一過性のものではございません。今後数十年にわたって展開されていくということでございます。おそらく水産基本法を制定した時よりも大転換が起これと考えております。我々行政もそうですが、試験研究機関も、この動きには本腰を入れて対応する必要があるというふうに認識しています。

いよいよもって試験研究機関の重要性というのは高まっています。本日の会議で有効な意見交換が行われて、こうした動きに対応していくことができるように機能しているわけでございます。

最後になりますが、本日、栄えある場長会長賞を受賞される方々に対しましては、心よりのお祝い申し上げるとともに、ご参集の試験研究機関の研究成果の水産業への貢献、さらにはご参加の皆様のますますのご健勝、本日の大会が活発な意見交換を行われ、実り多いことになるように祈念いたしまして、私の挨拶に代えさせていただきます。本日はおめでとうございます。

(3) 開催県

大分県農林水産部部長 大友 進一

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました農林水産部長の大友でございます。本日ここに、大分県で令和2年度の全国水産試験場長会全国大会が開催されるに当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

本日は全国の都道府県の水産試験場長の皆様、そして水産庁の黒萩増殖推進部長さんをはじめご来賓の皆様、大分県へようこそお越しいただきました。心から歓迎申し上げますとともに、本県での大会の開催できますことに、厚く御礼を申し上げます。本日ご出席の皆様方におかれましては、日頃から水産業を支える試験研究の発展のため、多大なる努力をされていることに対しまして、心から敬意を表します。

例年であれば、この全国大会は、現地意見交換会を含めて参加者皆様のご議論あるいは交流を深める場として2日間行われるところですが、ご案内の通り、新型コロナウイルス感染症の拡大ということで、今回は規模を縮小して、1日での開催となっております。本県もコロナ感染防止ということで、これまでかなり対策を尽くしてきましたが、実はここ2、3日で10人ぐらい、3日間で25人感染者が出ています。やはり寒くなってきた、非常に免疫力が低くなってきたと思っておりますけれども、しっかりとその対策をしておりますので、今日は安心してご来場いただいたというふうに思っております。

そういった中で、本県は国内でも随一の源泉数と湧出量を誇る日本一の「おんせん県」でございます。さらに、この秋、海の幸、山の幸が満載で、食も非常に充実しております。本日、おいでになって短い時間ではありますが、しっかりと大分県の魅力を堪能していただければと願っております。

水産業を取り巻く状況を先ほど来、会長或いは黒萩部長からお話ありましたが、非常に厳しい状況であろうかと思っております。そうした中で先ほどありました漁業法の改正、それに伴う資源管理、或いは地球温暖化やマイクロプラスチックといったような環境問題等、一つの県レベルでやるのは難しい課題もたくさんございます。そうした中で、本日お集まりの試験研究の皆さん方が、そういった課題に連携して取り組むことによって、また解決に一步近づいていくのかなというのを思っているところであります。そうした意味で、試験研究機関の役割というのはますます重要になってきているというふうに考えております。

関係各機関の連携、情報交換を密にすることによって、いい成果が出ると思っておりますが、この会議においてもしっかりと議論いただきたいと思っております。この後、本県からはマグロの養殖における赤潮対策といった事例も報告させていただきますし、会長賞を受賞される皆さん方の3つの報告もあるというふうに聞いております。そういった内容を含めて、本大会が実り多きものとなることを祈念申し上げます、開催県の挨拶とさせていただきます。本日はよろしく申し上げます。